



タンチョウ博士のお話 (第34回)

タンチョウにもワクチン接種を！

皆さんは、これまでコロナワクチン接種を何回受けられましたか？私の接種券では5回(昨年末時点)となっていて、あと1回、今年(令和6年)の3月末までに無料で接種を受けられます。

病気を起こし、場合により死を招くウイルスに対し、ワクチン接種という強力な武器で対抗する知恵をヒトは身につけ、そのおかげで、私も91年と10か月、生きながらえてきました。でも、鳥がかかるインフルエンザ、いわゆる鳥フルに対し、ヒトはまだ有効な^{たいこうさく}対抗策を持っていません。もちろん、ワクチンを作るのは可能でしょうが、野生の鳥や1か所に何万というニワトリ1羽1羽に、^{けいひ}経費的に見合う形で、どうやってワクチンを注射するのでしょうか？

さて、タンチョウが^{こうびょうげんせい}高病原性鳥フルに感染して死亡した例が、令和4年に初めて北海道で起きました。場所は道東の^{おんべつ}釧路市音別町の川で、親離れ前の幼鳥メスです。本来はオス幼鳥も含む4羽家族でしたが、兄か弟かわかりませんがオス幼鳥は早くに亡くなったらしく、親の消息もつかめていません。

しかし、北海道に定住するカラス、渡り鳥のカモ類・^{もうきんるい}ハクチョウ、猛禽類のハヤブサ・オジロワシなどで、鳥フルによる死亡は10年ほど前から起きています。それでも、鳥フルで保護されたハクチョウのいた越冬地で、一緒に暮らすタンチョウがなんともなかった例もあります。つまり、同じウイルスの働きに影響を受けやすい、^{かんじゆせい}いわば感受性の強い種や個体もいれば、影響を受けにくい種や個体もいるのです。

さらに、ウイルスは形や働きがよく変わり、さほど害のない^{ていびょうげんせい}低病原性から、害を強く与える高病原性へ変身することもよくおきます。こうしたことが重なり、令和5年はすでに道東の^{べっかい}別海町(2羽)・^{しべつ}標津町・^{しべちや}標茶町・^{まくべつ}幕別町で、タンチョウが計5羽死にました。しかし、この数は、たまたまヒトが見つけた羽数です。

長沼町のまわりでは、札幌市や^{びばい}美唄市・むかわ町で、カラス・ハクチョウが鳥フルで今秋死んでいます。ただ、道央のタンチョウは、今は主に日高で越冬しています。イスラエルでのクロヅル8,000羽とか、九州の^{いずみ}出水市のナベヅルなど1,500羽死亡などは、^{ねぐら}埒が沼や水田といった水の流れにくい環境のため、^{ふんべん}糞便に含まれるウイルスも高濃度に溜まりやすいことが^{いちいん}一因のようです。しかし、日高では川が埒なので、糞便も流されやすく、感染も起きにくいとは思いますが、油断はなりません(写真)。

舞鶴遊水地のタンチョウとカラスの群れ



鳥フルによくかかるカラスやカモなどと、タンチョウは遊水地で一緒に暮らしています。

来月には、タンチョウもまた舞鶴遊水地へ戻って来るでしょう。その時、鳥フルにかからないよう、ワクチン接種券に見合うものを発行できないか、今から皆で考えておきましょう。(文・写真：正富宏之)

【問合せ先】役場企画政策係(☎76-8015)